No. 105

ティー・ブレイク

Tea Break

夢幻の如く

4月は桜，そして入学のシーズンである。けれども，弁理士試験の受験生にとっては，一斉に咲いた桜の花がいっせいに散ると，いよいよ本格的な多肢のシーズンとなる。因みに多肢は，今では「短答式試験」と言われているが，内容そのものにそう大差はない。

受験勉強では，記憶を正確にするために繰り返し作業が要求される。この中で，トピック的なものは，それこそ印象が強いので，意外に簡単に記憶することができるのであるが，その一方で，何の変哲もない「普通の項目」が憶え難く，実はそれが合否を決める。そして，このあたりを誤解し，「当たり前」のことを馬鹿にしてトピック的なもののほうばかりを追うようになると，合格が遅れることになる。

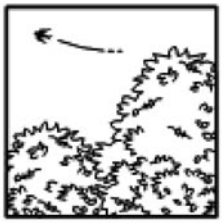
人間の人生においても，入学式や卒業式のほうが記憶に残るが，知識や人格形成という面からすれば，記憶にも残らない日常のほうがよほど大事である。よくよく考えてみれば，入学式や卒業式なんて，ほんの数回でしかない。

ところで，弁理士試験の受験生の頃は，自分はもしかしたら永遠に受からないのではないかと思えるようなときがあり，それがとても辛かった。しかしながら，合格してから分かる事なのであるが，実は，確実に「合格後の人生のほうがはるかに長い」のである。

けれども，逆境こそが人間を成長させるのであるから，受験生時代に得るものは多い。実際に，あの「短い時代」に得た貴重なものが，その後の「長い時代」に役立っている人は多いのではないかと思う。してみれば，試験問題や試験制度という類のものですら，易しくすることだけが親心ではない。

そう言えば，日曜の昼になると，あまり物をうまく使って母が作ってくれた焼き飯（チャーハンではなくて“焼き飯”である）や焼きソバを思い出す。もう13回忌も過ぎようとしているのに未だに思い出すというのは，よほど“繰り返し”をされたに違いない。ただあの頃は，まずいの，べたついてるの，もう飽きたなど，色々と言いながら，日曜の昼に両親と妹と弟がそろって焼き飯を食べるのが永遠に続くと思っていた。そう。ずっと，ずっと，長く続くと思っていた。

そして，その後に続くもっと長い時期を過ごすようになって，母のエプロンの刺繍がぼやけて思い出せるようになってくると，あの時代が短く，本当に貴重な時代であったことが実感される。けれども，大人になってからはむしろ，そんな時代もあったのかと思うくらいのもので，良いことも悪いことも，まさに夢や幻の如きものである。

受験生時代も弁理士の新人時代も，自分の力不足というものを嫌と言うほど思い知らされる辛い時期なのであるが，あとから見れば，そんな時代もあったなぁと思うぐらいのものである。現に外の桜も，もうしばらくすると，緑がいっぱいに生い茂るようになる。（正）

Turn of the seasons